

実践報告

「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」における取組み

— 造形表現ゼミと特別支援保育ゼミにおける教育実践 —

Initiatives at the Creative Recycling Center KG

: Educational Practices in the Seminar for Artistic Expression and the Seminar for Childcare with Special Needs

佐藤牧子	国際学院埼玉短期大学幼児教育学科
東 敦子	国際学院埼玉短期大学幼児教育学科
大野琴絵	国際学院埼玉短期大学幼児教育学科

本稿では、創作活動を自由に行える“場”と“素材”を提供する拠点として「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」を設置し、本学学生および卒業生等に向けての学びの場を提供した実践を、本学の第V期中期目標の一である「ナレッジ・ビレッジ構想」の観点も加えて報告する。初年度の実践として、本学幼児保育学科の造形表現ゼミおよび特別支援保育ゼミの学生指導の場での教育実践に加え、卒業生を対象としたリカレント教育の一環として、両ゼミ共同での学び直し講座およびワークショップを開催した。本実践は、卒業生を対象に含んだ点で、本学の中期計画「6・SDGs 基本原則の推進、地域貢献活動」と「9・リカレント支援」に合致する。また、「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」は、学生が卒業生を含め、多様な人と関わりながら学びを深められると同時に、地域において「知の拠点」「サード・プレイス」としての役割を果たす可能性があり、大学の価値を高めることに資するという点で、今後の継続的な発展が期待される。

キーワード 造形表現 特別支援保育 リサイクルセンター ナレッジ・ビレッジ構想
リカレント教育

1. はじめに

本報告は、創作活動の充実を目指して2024年度に多様な“素材”と“場”を提供する拠点として設置した「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」の実践を報告する。初年度の実践として、本学の幼児保育学科造形表現ゼミ（第1筆者）および特別支援保育ゼミ（第2筆者）の学生への教育実践に加え、リカレント教育の一環として卒業生を対象に開催した学び直し講座（第2筆者）およびアートワークショップ（第1筆者）の実践を報告する。本実践の活動理念となる「ナレッジ・ビレッジ構想」については第3筆者が概説する。

はじめに、「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」のプロジェクトが始動した背景と内容、また関連する本学の取組みとして「ナレッジ・ビレッジ構想」について触れておく。

1-1. 「クリエイティブ・リサイクルセンターKG*」について *KG=Kokusai Gakuen

(1) 背景

子どもたちの主体性を尊重し、子どもたちの想像性や創造性、探究心を伸ばす革新的な幼児教育として、世界中の教育者や研究者から注目されているレッジョ・アプローチ (Reggio Approach)¹⁾は、1940年代にロリス・マラグッツィ (Loris Malaguzzi) が、イタリアのレッジョ・エミリア市に地域の保護者たちとともに幼児のための教育施設を立ち上げたところから始まっている。レッジョ・アプローチ (Reggio Approach) は、子どもたちが自分の興味や疑問を出発点としたアート活動や、一つのテーマを長期的に探求していくプロジェクト型の学びを展開している。それらの学びを支える仕組みの1つとして、地域や企業が連携し、廃材やリサイクル素材等を集めた学習資源センターであるレミダ (REMIDA) と呼ばれる施設がある。

一方、第1筆者は以前から廃材・リサイクル素材 (以下、廃材等) を子どもたちの造形活動に活用してきた²⁾。それらの素材を活用する背景には、素材が不揃いであったり、活用方法が明確でなかったりする点が、造形活動にもたらす想像性 (イマジネーション) と創造性 (クリエイティビティー) に魅力を感じてきたからだ。加えて、日々企業や工場からは造形素材になりうる廃材等が排出されているが、それらが教育現場で生かされている事例は個々の教師の範疇にとどまっており、組織として運用されている事例が少ない点に注目してきた。いずれセンターになりうる「場」が確保できれば、レッジョ・アプローチ (Reggio Approach) におけるレミダ (REMIDA) のような造形素材を集めたセンターを作り、地域の子どもたちをはじめ、学生や地域の大人にも利用してもらうことで、教育の場や地域と企業や工場などがつながる拠点を作りたいと考えてきた。

(2) 設置の経緯

2024年5月、本学の学生会館が本館建物から独立している点、造形活動を行う際の他教室への騒音等の影響が少ない点、造形素材の搬入が容易である点、外部の人が立ち寄りやすい点などから、「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」に適した環境であると考え大学に相談したところ、すでに「ナレッジ・ビレッジ (さいたま国際知識村) (KG Knowledge Village in Saitama)」(表1) 構想があることを知った。そこで、ナレッジ・ビレッジ構想を踏まえた形で、造形表現ゼミの活動の一環として「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」の設立と運用に向けて始動した。設置に向けては、学内の修繕やSDGsの観点から廃材等の利活用を進めている学校職員 (専門員) と連携して進めている。

現在は、学校職員 (専門員) が中心となり試行錯誤を重ねながら、集めた素材の安全面を確認した上で種類ごとに分類し、フロアには創作活動が行えるように机と椅子を配置している (図1)。

(3) 仕組み

図2に示す通り、「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」を中心にして、造形素材を提供する側 (工場・企業・地域・個人など) と受け取る側 (教育機関・施設・地域・個人など) が存在する。「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」は、双方のニーズや実態、未だ造形素材としての価値が見出されていないモノなどを発掘し保管・管理を行う。利用者 (子ども～大人) は、センターを介して〈つくる〉活動を充実させると同時に、これまで関わることのなかった工場と教育機関や地域と個人など、新たなつながりをもつこ

とが可能となる。さらに、利用者にとってのサードプレイス (Third Place)³⁾ としての役割を果たすことも期待できるなど、モノや場に対する新たな価値の創出が行われるクリエイティブの拠点としての役割を果たす仕組みである。

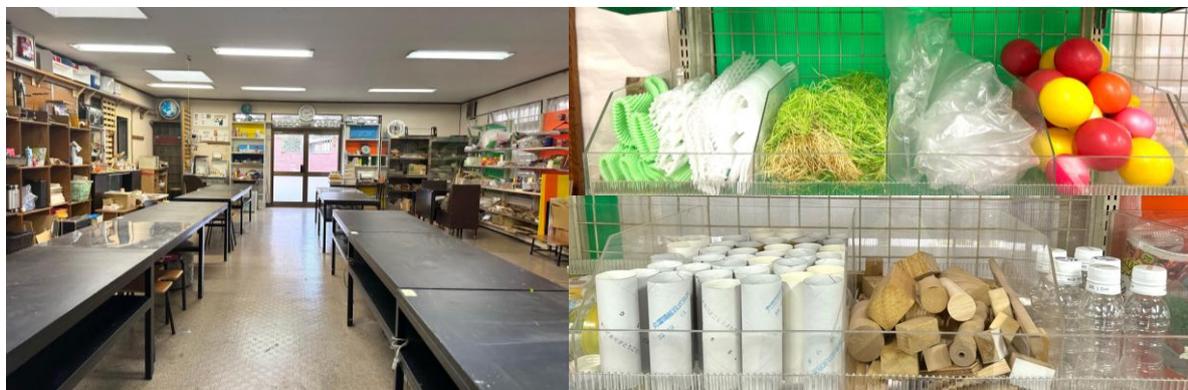


図1 クリエイティブ・リサイクルセンターKGの様子 (2025. 1. 20 時点)



図2 クリエイティブ・リサイクルセンターKGの仕組み⁴⁾

1-2. 「ナレッジ・ビレッジ(さいたま国際知識村)構想」について

国際学院埼玉短期大学には、2019年3月18日に理事長大野博之より掲げられた「ナレッジ・ビレッジ(さいたま国際知識村) (KG Knowledge Village in Saitama)」構想がある。本計画は「場(Ba)＝知識を創造するために人と人に相互関係がある状態」を目指している。

表1の通り、本学のナレッジ・ビレッジ構想では「Ba」を重んじている。国際学院埼玉短期大学は、教養とコミュニケーション能力からなる「豊かな人間力」と、専門職業人としての知識や技能からなる「確かな専門力」を担う専門人を育成しており、「地域の学習共同体」として学校や大学に地域内外の様々な世代の人々が参画し、総合された学び合いが展開される姿は、大切な「社会的共通資本」として次世代に残すべきものであり、国際学院が目指すものである。大野誠学院長の「連続無窮」の訓え⁵⁾のとおり、新たな時代を担う「人づくり」こそが、本学院の存在意義そのものである。

このように教職員間では「Ba」を重要視した構想が共有されていたが、授業を巻き込んだ具体案は模索状態であった。「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」のプロジェクト

トは、本学院のナレッジ・ビレッジ構想を学生や卒業生にも浸透させ、地域との交流を経て、各々の実践的な学びに繋げることができるという点で大きな可能性を有している。

表1 国際学院埼玉短期大学のナレッジ・ビレッジ構想

2019/03/18
ナレッジ・ビレッジ（さいたま国際知識村） (KG Knowledge Village in Saitama)
○その村にはいろいろな「人」が集まります。 <ul style="list-style-type: none">・子供やお年寄り、若者や壮年・熟年の人もいます。なかには支援が必要な人もいます。・悩んでいたり、困ったりしている人もいますが、誰かの役に立ちたいと思っている人もいます。・学びたい人がいる一方で、いろいろな経験をしていて、それを伝えたい人もいます。・その人たちの国籍は多国籍です。
○その村には「使命」があります。 <ul style="list-style-type: none">・いままで、できそうでできなかったことをするのです。・それは実践に結び付く体系的な「知識創造 (Knowledge Creating)」をすることです。・そのことは、知識創造社会を担う人材の育成にもつながります。・創造された知識によって、困難とされている課題を解決することができるようになります。
○その村にはいろいろな「場所」があります。 <ul style="list-style-type: none">・学校、図書館、楽堂、食堂などです。最も特長的な所は「Ba (場)」というところでは。・Ba は「知を創造する」ための空間で、人と人との相互関係が大切にされています。・Ba は物理的、仮想的、心理的空間につくられますが、空間そのものが Ba ではありません。・Ba は、物理的な場所だけでなく、特定の時間と空間、あるいは「関係」の空間も意味します。会議室を例にとれば、そこに誰もいなければ Ba とはいえません。会議室に人がいて、人と人との間のやり取りがあって、はじめてそこが Ba になります。・知識創造における Ba の本質は「相互関係」です。・なぜなら、知識は文脈から切り離しては存在できないからです。
○その村には「宝」があります。 <ul style="list-style-type: none">・それは社会資本 (Social Capital) の源泉ともいわれる「知識資産 (Knowledge Assets)」です。・協力的な人間関係は、新たな価値 (知識資産) を生み出す機能を有しています。・その資産は Ba に集まる人たちの「対話 (相互頼と相互作用)」によって泉のように生まれます。
○その村で働いている人は、みな「同じもの」を持っています。 <ul style="list-style-type: none">・それは世の中を、より豊かにしようとする「夢」や「生きがい」です。・そこで働いている人は、みな笑顔で次のようにいいます。"I have a dream."
※「Ba」の概念については『ナレッジ・サイエンス』北陸先端科学技術大学大学院知識科学研究所 ISBN4-314-10153-9 を参照。

2. 造形表現ゼミでの授業実践

造形表現ゼミでは、6月から「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」の設立を視野に入れて、レッジョ・アプローチ (Reggio Approach) やレミダ (REMIDA) について学び、実際にセンターになる学生会館にて廃材等を活用したさまざまな活動を展開した。活動に際しては、素材の扱いや加工技術、道具の使い方など、学校職員 (専門員) の協力を得て行なった。

2-1. 日々の活動実践

- (1) コロナ禍において学内で使用していた飛沫防止のパーテーション (アクリル板) を活用した活動では、野外で絵を描くことを通して素材 (アクリル板) の理解を深めた (図3、図4)。
- (2) プリーツ生地を加工した後、工場から廃棄されるプリーツ状の紙については、実際に工場を見学した際に撮影した加工工程の画像とともに説明を行った上でドレス作りを行った (図5)。後日、一部学生が工場見学に訪れてインタビュー調査も行なった。
- (3) 黒板塗料で廃棄された看板 (ポリエチレン性) や木材を塗装して、色々な形の黒板を作ったり、アクリル板と組み合わせて「らくがきハウス」の模型を作ったりした (図6)。その経験を活かして、学園祭 (五峯祭) では実際に来場者が入ることのできるサイズの「らくがきハウス」を作った (図7)。後日、一部学生が看板の廃材を提供してくれている会社を訪れてインタビュー調査も行なった。
- (4) 「流しそうめん」を行う際は、目的に適したサイズの竹が必要であったことから、国際学院中学校高等学校の竹を分けていただき、実際に竹を切ったり整えたり (図8)、2つに割ったり (図9)、竹串や箸を作ったり (図10) した。準備段階で十分に竹にかかわった後、流しそうめん (図11) を行うことで、素材の特徴を理解して扱えるようになることを目指した。流しそうめんの当日は、特別支援保育ゼミと合同で楽しんだ。
- (5) 日々の活動を行いながら同時並行で、「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」の設置に向けて、廃材等の素材 (ガチャガチャのカプセルやトイレットペーパーの芯、缶や布など) 集めを行ない、必要に応じて消毒をしたり適切な加工を加えたりした。



図3 屋外でアクリル板に絵を描く



図4 素材を通して空を見る



図5 プリーツ状の廃材紙で作ったドレス



図6 らくがきハウスの模型



図7 実寸大のらくがきハウス



図8 竹の枝を切る



図9 棒を使い竹を2つに割る



図10 鉦で竹を切り箸を作る



図11 流しそうめん

2-2. 「第13回 学生政策提案フォーラム in さいたま」の参加

(1) 事業概要

さいたま市は、大学コンソーシアムさいたまと連携して地域課題の解決や活性化を目的として、大学コンソーシアムさいたま加盟大学の学生が専門分野等を生かし、さいたま市の政策について提案する事業として2011年から「学生政策提案フォーラム in さいたま」を行なっている⁶⁾。

(2) 提案内容

「Creative Recycle Center クリエイティブ・リサイクルセンター
— つくる喜び、新たな価値の創出 —」

造形表現ゼミは、学内規模で実践している「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」の仕組みをさいたま市の行政の取組として行うことで、センターの充実と運営の持続可能性が担保され、認知度を上げることにより、多くの市民に「つくる喜び」と「創造 Creative の場」を提供し、「新たな価値」の創出が行えることを政策提案した。1・2年生全員（10名）でエントリーし、当日の発表は2年生が行なった（図12）。発表では、教育現場や先行する実践の調査、これまでゼミ活動で行なってきた廃材等を活用した造形活動の紹介に加え、実際にプリーツ加工工場が廃棄するプリーツ状の紙を衣装（着物とドレス）として着用すること

で、廃材に新たな価値を見出す視覚的な工夫を行ない（図 13）、最優秀賞を受賞した。



図 12 発表を行う造形表現ゼミの2年生



図 13 プリーツ紙の廃材を着用した2年生

2-3. まとめ

造形表現ゼミでは、実際に身体を動かしながら活動することを通して、実感の伴う体験を重視した。ゼミ活動は3つの柱で構成した。1つ目の柱は「造形活動を実践する主体」としての活動、2つ目の柱は「造形活動をファシリテートする主体」としての活動である。具体的には、造形活動に必要な素材と場を提供するための「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」を作る活動である。3つ目の柱は「第13回 学生政策提案フォーラム in さいたま」で政策提案することを通して、自分達の取組みを大きな枠組みで捉え直すとともに、社会と接点を持ち社会を意識した活動にすることである。

2024年度は、3つの柱の中心に「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」を置き、活動の目的に合わせて立ち位置を変えながら実践を行うことで、造形表現を立体的に捉えられるようになることを目指した。成果を測る基準を設けていないことから、本報告で達成度は明らかにすることができないが、造形する者・表現する者としての立場と、その主体を支えるファシリテーターの立場を行き来することは、保育者としてのスキルにつながるものである。さらに、社会と接点を持ち、社会に対して提案する行為は、シチズンシップ教育 (citizenship education) の面からも教育的意義があるものと考えられる。

個々の活動において、学生自身がどこまで自分の立ち位置、つまり学びの方向性を理解して取り組んでいたかという点は課題として残る。身体を通して学びを積む活動は往々にして「活動あって学びなし」に陥ることがある。次年度以降は、その点を考慮して改善を試みたい。

3. 特別支援保育ゼミでの授業実践

3-1. 日々の活動実践

特別支援保育ゼミでは、障害の有無や国籍などに関わらず、多様なニーズのある子どもが利用しやすく、共に関わるができる「ユニバーサルデザイン教材(以後、UD教材)」の開発を研究テーマとしている。第2筆者は障害児のための指導マニュアルとして開発した「認知・言語促進プログラム」⁷⁾に基づき、身近な廃材を使った教材作成について授業の中で取り組んでいたことから、「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」を活用することとなった。2024年

7月に、造形表現ゼミと合同で行った「流しそうめん」に参加し、その後、残りの竹材や、その他、工場等から寄付された廃材などを使って、UD教材としての楽器などの作成に取り組んだ。さらに、学修成果の発表として、同年11月に五峯祭において手作りUD教材を展示し、卒業生を含む来場者にUD教材を用いた支援についての説明を学生がおこなった。

3-2. まとめ

我が国には障害のある子どもが使用しやすい市販玩具を認証する「共遊玩具」という認証システム⁸⁾があるが、実際の教育現場では個々のニーズに合わせ、即時的に教材を用意する必要があることから、共遊玩具だけでなく、身近な廃材を使った手作り教材がよく用いられている。今回、素材として活用した竹やアクリル板、ロール芯は「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」に保管されていたものであり、竹の伐採や搬入、各素材の加工などは、第1筆者や学校職員(専門員)との連携があったからこそ実現できたものである。このように一般には手に入れることが難しい素材を手に入れ、加工作業の相談ができる拠点が整えられることは、多様なニーズに即時的に対応することを求められる現場の保育者をバックアップすることができ、かつSDGsの「質の高い教育をみんなに」の実現に寄与するものである。



図14 流しそうめんで使用した竹などを加工し、楽器を作成する
(ツリーチャイム・レインスティック・スリットドラム)



図15 アクリル板を利用した楽器
(オーシャンドラム)



図16 ロール芯を利用した楽器
(マリimba)

4. 卒業生のための学び直し講座

本学では、卒業生を対象としたリカレント教育の一環として、五峯祭の開催中にホームカミング講座を実施している。主に卒業生を対象に、学校教育からいったん離れたあとも学び直せる機会を地域に提供していくことは、本学の中期計画「SDGs 基本原則の推進、地域貢献活動」と「リカレント支援」に合致する。2024年度は、特別支援保育ゼミの指導教員である第2筆者が第1部「卒業生のための学び直し講座」の講義を担当し、第2部のアート・ワークショップを第1筆者が担当した。

4-1. 第1部：講義

講義内容は特別な支援の必要な子どもへの支援についてであり、ユニバーサルデザインの考え方について概説し、五峯祭で展示した手作り楽器及び「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」について紹介した。受講後に参加者を対象としたアンケートを実施した結果を以下に報告する。

(1) 講義の概要

開催日時：2024年11月10日 12時50分～13時40分 参加人数：19名

テーマ：「特別支援の必要な子どもへのユニバーサルデザイン支援～発達障がいや虐待リスクの子ども、海外ルーツの子どもたちの理解～」

(2) アンケート調査

講義終了後に、下記の内容について Google Form でアンケートを実施した。

- ① 講座について（大変良かった・よかった・あまりよくなかった・その他）
- ② 現在の状況について（在職中・今後復帰の予定・今後、保育資格を取得したい）
- ③ 今後、学びたい講座（複数選択可）※図17参照
- ④ 学ぶ期間や頻度（年2回程度・月1～隔月 定期的に・隔週×3か月程度）
- ⑤ 学ぶ方法（対面・オンライン・全くない・配信・どちらでも）

(3) アンケート結果

アンケートの結果、学び直し講座の受講者は63.2%が現任の保育者であり、21.1%が現在は保育者としての仕事はしていないが、今後復帰を考えている潜在保育士であった。講義内容に対する受講者の満足度は、「大変よかった」が47.4%、「よかった」が52.6%であり、受講者の100%から肯定的評価が得られた。今後、リカレント教育として学びたい内容は、図17に示すように、「発達障害への対応について」が全体の84.2%で最も多く、「児童発達支援事業や放課後等デイサービスなどでの支援について」が63.2%で次いで多かった。「虐待や貧困の問題について」は47.4%、「事故や病気への対応」「手遊びやペープサートなどの教材制作のワークショップ」が36.8%と関心の高いテーマであった。「海外ルーツの子どもについて」や「医療的ケア児について」も31.6%で、多様な子どもへの対応に関するニーズがあることが示されている。「衛生看護やアレルギー対応について」や「地域交流」については、15.8%と関心の度合いとしては他に比べると低かった。学ぶ期間や頻度については、「年に2回程度」が63.2%、「月1回～隔月 定期的に」は31.6%であった。「隔週3か月間程度、特定のテーマに添って集中的に」は少なかった。実施方法としては対面が73.7%で、オンラインが10.5%であるのに比べると圧倒的に多かった。

自由記述の内容をまとめた結果を表2に示す。「大変勉強になった」という【講義に対する満

足】や、「学び直しの勉強ができ良かった」というような【学び直しの機会への感謝】が示されている。具体的には、「変動している時代にそって、もっと学び直したくなった」「新しい情報を勉強しなくてはと思った」というように【時代の変化に対応できる学びのニーズ】が示されている。講義のテーマに関連することとしては、「ユニバーサルデザイン支援について学べて知識がふかまりました」「特別支援のお子さんへの対応（が学べた）」など、【多様なニーズのある子どもへの対応の学び】が深まったことが示された。

アンケート実施後は、特別支援保育ゼミの学生が作成した「ユニバーサルデザイン教材」を作成した「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」に移動し、教材づくりの工夫などを話題としながら参加者同士の交流機会を行なった。希望者は、同時開催していたアートワークショップの活動に合流した。

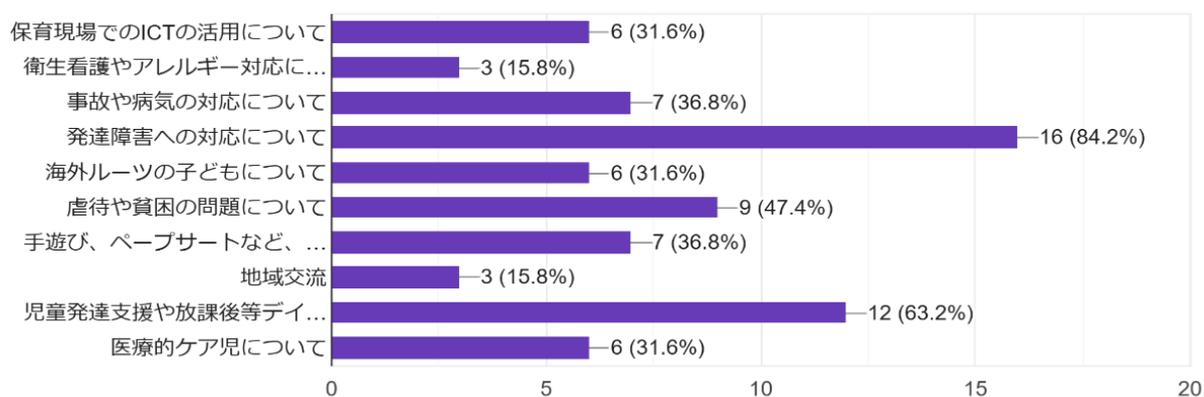


図 17 「学び直し講座」で今後学びたい内容

表 2 「学び直し講座」の感想（自由記述）

【講義に対する満足】
・大変勉強になりました。ありがとうございました。
・今回の講座勉強になりました。ありがとうございました！！
・とても良かったです。
・40年ぶりの座学は楽しかったです
【学び直しの機会への感謝】
・学び直しの勉強ができ、良かったです。大変ありがとうございました。
・このような学び直しの講座の開催をありがとうございました。
【時代の変化に対応できる学びのニーズ】
・変動している時代にそって、私ももっと学び直したくなりました。
・当時の障害児保育がこんな風に変化していると勉強になりました。
・保育現場には様々な対応のニーズがあり、子どもだけでなく保護者へのかかわりが増えてきており、時代の流れも変わり新しい情報を勉強しなくてはと思いました。
【多様なニーズの子どもへの対応に関する学び】
・ユニバーサルデザイン支援について学べて知識がふかまりました。
・特別な支援の必要なお子さんへの対応、社会全体として出来ること、今後このようなことにも目を向けて自分でも出来ることをさせて頂きたいと思いました。
・注意欠陥の疑いがある子がいるのでお話を聞いてよかったです
・望ましい行動を増やすことが大切だと分かりました。
【その他】
・竹で作られた楽器がとても綺麗で参考になりました。
・療育を開始して初めてなので、模索しながら進めていきます。

4-2. 第2部：アート・ワークショップ

(1) ワークショップの概要

開催日時：11月10日 13時00分～15時00分

テーマ：「大人も子どももみんな集まれ！アートワークショップ」

場所：クリエイティブ・リサイクルセンターKG（学生会館）

活動内容：センター内にある多様な素材を使い、好きなものを作ってみる。

(2) 参加者の概要

参加者（11名）9月実施の公開講座（親子創作）に参加した親子（母・幼児）、卒業生と家族（夫・小学生）、学生（委託訓練生）の夫、第1部の参加者（現役保育者）など
見学者（12名）第1部の参加者

(3) 参加者の声 *1部補足あり

- ・「子どもたちにとっては、木にカナヅチで釘を打つような体験が減っているので、それがおもいっきりできてとてもいい。そのような体験は、デジタルで綺麗な正解を出せる時代だからこそとても重要だと思っている。釘が少し曲がってしまっても、最後は力で叩き入れるといったような体験がデジタル体験ではできないから、木に釘を打つような体験を通して子どもたちにはデジタル体験では学べないものを学んでほしい。」（息子2人の父）
- ・「また、明日もここに来て作りたい！」（幼児）、「次、いつやる？」（幼児）
- ・「この廃材は、〇〇に使えると思うので、持ち帰って試してみます。」（保育者／卒業生家族）
- ・「息子（幼児）は、9月に参加した公開講座が楽しかったようで、それ以来ずっと大学にまた行きたい！と言っていたので今日は来ました。」（9月の公開講座に参加した母）



図18 ワークショップに参加した子どもたちと活動する学生と大学職員（専門員）

4-3. まとめ

第1部の講義についてのアンケート（表2）では、今後学びたいこととして「地域交流」を選んだ参加者は少なかったが、研修方法では「対面」で実施を望む参加者が多かった。このことは、卒業生にとっての母校で行われる「学び直し講座」は、単に知識の習得だけでなく、学び合える仲間との出会いや交流を期待していることを示している。また、今回の調査で、参加者が特に関心を示していた「多様な子どもへの対応」の学びは、単なる知識の積み上げではなく、多様な人々との出会いや協働によって、地域の中で深化していく可能性がある。リカレント教育の機会を母校で実施することは、卒業生にとっては足を運びやすいという利点があり、さらにその交流拠点の一つとして「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」を活用すること

は、新たな出会いに結びつくという可能性がある。このような協働活動は、多様な人との交流による新たな知の創出を目指しているナレッジ・ビレッジ構想を実現するものといえる。

また、本実践は、卒業生を対象に含んだ点で、本学の中期計画「SDGs 基本原則の推進、地域貢献活動」と「リカレント支援」に合致する。「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」は、学生が卒業生を含め多様な人と関わりながら学びを深められると同時に、地域において「知の拠点」「サード・プレイス」としての役割を果たす可能性があり、大学の価値を高めることに資するという点で、今後の継続的な発展が期待される。

5. 課題と展望

「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」のプロジェクトを進める過程で、学科内の教員だけでなく、他学科の教員や複数の大学職員とかかわり協力を得ることができた。その中で、それぞれの教員の専門分野の視点、大学職員（部署ごとに異なる）の視点、大学経営の視点などに触れたことで、改めて「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」という1つのプロジェクトにおいても、かかわる人と視点が增えることによって、捉え方や活用方法、活用の展開や可能性を多角的に見出せることがわかった。また同時に、全国の短大・大学と同様に本学においても、教育力の向上、教育活動の充実（科目ごとに異なる）、地域連携の促進、入学者の確保、リカレント支援、資源（人・物・場）の活用など、学内にはさまざまな課題があることも確認した。そして、これらの多様な課題を包括的に解決していくためには、多角的な視点とアプローチが不可欠であることも再認識する機会となった。

短大・大学は、それぞれの専門領域をもつ研究者が集まるところであるがゆえに、連携したりコラボレーションしたりすることが往々にして難しい局面があると感じてきた。しかし、所属や専門分野を越境することで得られる「異なる視点」によって創造力が刺激されたり、異なる視点と融合することで「新たな視点や価値」を見出したりすることは、教育と研究の両側面において極めて重要であると考えられる。

それらを踏まえた上で、プロジェクト「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」の初年度の課題としては、第1筆者が活動を通して試行錯誤を重ねながら方向性や到達点を探ってきたことから、参加者・協力者への説明がその都度十分でなかった点があげられる。プロジェクトの目的を理解することで、参加者・協力者が増え、プロジェクトに多様な価値付けが可能になることを鑑みると、プロジェクトの理解促進は大きな課題といえる。また、素材収集を通して企業等と関わる場面があったが、初年度は一方的に協力していただく形に留まり、産学連携の取組みには至らなかった点も課題である。

今後の展望としては、「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」の初年度の活動が、創作活動の視点を中心としたものであったため、次年度以降は本学の学生・教員・職員をはじめ、系列園や地域の方にも興味をもってもらい、参加者が個々に自分のニーズを満たせるような場として発展していけるよう工夫を重ねたいと考えている。また、本学の「ナレッジ・ビレッジ構想」の使命である実践に結びつく体系的な「知識創造（Knowledge Creating）」の実現や、「第13回 学生政策提案フォーラム in さいたま」の提案を足がかりとした産学官の連携も推進していきたいと考えている。

研究倫理：本研究の調査対象者には本研究の目的を説明したうえで、自由参加の旨および参加の有無によって不利益を被ることがないことを口頭および文書で説明し、アンケートへの記載を依頼した。回答は無記名式とし、個人が特定されないように配慮した。また、写真の使用についても同様に、対象者に研究目的を説明したうえで、使用する写真を提示して許可を得た。

謝辞

「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」の運用に向けてご尽力くださった皆様に感謝申し上げます。

著者の利益相反：開示すべき利益相反はない

文献

- 1) アレッサンドラ・ミラーニ（著）、水沢 透（翻訳）『レッジョ・アプローチ 世界で最も注目される幼児教育』2017, 文藝春秋
- 2) 佐藤牧子 『子どもたちのためのアートワークショップの可能性 —持続可能な発展とホリスティック教育の観点から—』2023, ホリスティック教育/ケア研究;第 26 号: 1-13.
- 3) レイ・オルデンバーグ (Ray Oldenburg) 『The Great Good Place』1989, Paragon House
- 4) 佐藤牧子 「第 13 回 学生政策提案フォーラム in さいたま」の発表資料を一部修正, 2024
- 5) 大野博之 『故大野誠先生 追悼 ～連続無窮の訓え～』2022, 国際学院新聞 特別号 学校法人国際学院
- 6) さいたま市：「第 13 回学生政策提案フォーラム in さいたま」を開催しました！
<https://www.city.saitama.lg.jp/006/007/002/012/002/003/p117956.html>（参照：2024.12.30）
- 7) 津田望・東敦子編 『認知・言語促進プログラム—NC プログラム—』1998, コレール社
- 8) 一般社団法人日本玩具協会共遊玩具推進部 『共遊玩具ガイドライン』2024
https://www.toys.or.jp/pdf/kyoyu/kyouyu_guideline.pdf（参照：2024.12.30）